

生徒の考える力を伸ばし、学習意欲を高める 言語活動の「7つの指針」

東京女子体育大常任理事・教授 田中洋一

言語活動の重要性は誰もが認めるところだが、活動の意義や効果的な方法は十分浸透しているのだろうか。どのような点に気を付ければ、生徒の学力向上につながる活動となるのか、活動の意義と実践の要点について、国語教育の専門家である、言語活動に詳しい東京女子体育大の田中洋一教授に聞いた。

言語活動は、教科の目標を達成するための手段

現行の学習指導要領の告示から6年が過ぎて、「言語活動」という言葉は学校現場にかなり浸透してきたと思います。ただ、各校の様子を見ると、全校一丸となって積極的に推進している学校がある一方で、依然として言語活動のねらいを理解しきれていない学校があるように感じます。

2007年に学校教育法が改正され、学力の要素が「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」であることが明示されました。

従来の日本の学校教育は、「知識・技能」においては一定の成果を上げてきました。しかし、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA）」や文部科学省「全国学力・学習状況調査」などの結果から、子どもの「思考力・判断力・表現力」「主体的な学習態度」に課題があることが浮き彫りとなり、それらの力を高める方策の一つとして、学習指導要領に「言語活動の充実」が示されたのです。

ここで忘れてはならないのは、言語活動はあくまでも教科目標を達成するための「手段」であることです。例えば、「コミュニケーション能力の向上」を全教科の言語活動の柱にしている学校があります。それ自体はよいと思いますが、学習指導要領の趣旨と照らし合わせ

てみると、重点の置き方に偏りがあるといわざるを得ません。言語活動を取り入れた授業を設定することによって、それまで伸ばし切れていなかった生徒の思考力・判断力・表現力や学習意欲を高める———それが、言語活動の本来のねらいだからです。

言語活動を授業改善の中心にすることで、校内研修がより深まります。中学校は教科担任制で、教科を超えて校内研究を行うのが難しいといわれてきました。しかし、言語活動は全教科に共通することであり、学校全体で取り組むことが出来ます。言語活動を横軸とした教科横断型の研究が可能になるのです。

例えば、数学の授業としての評価は、数学の教科担当以外の人にはやりにくいものです。

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として



たなか・よういち◎横浜国立大大学院修了。専門は国語教育。東京都公立中学校教諭、東京都教育委員会指導主事・指導室長等を経て現職。中央教育審議会国語専門委員、国立教育政策研究所全国教育課程実施状況調査結果分析委員会副主査、同研究所評価規準・評価方法の工夫改善に関する調査協力者会議主査などを歴任。学習指導要領中学校国語作成協力者。主著（編著）に『中学校国語科新学習指導要領詳解ハンドブック』『国語力を高める言語活動の新展開 全4巻』（いずれも東洋館出版社）など。

が、授業で行った言語活動が、生徒の考えを深めるのに適切なものだったのか、考えるための資料や時間は十分にあったのかという視点であれば、教員全員で議論できます。また、前月に行った体育の授業では生徒への事前の情報提供が足りなかったので、翌月の社会の授業ではそこを工夫しようというように、学校全体で研究の連続性が生まれ、段階的に研究を深めていくことも出来ます。

全校体制で言語活動に取り組む学校から、「教科の横のつながりが密になり、風通しの良い風土が醸成された」とよく聞きます。まずは管理職やミドルリーダーの先生が、言語活動を行う目的や、学校が目指す方向性を明確に示すことが重要です。

1 言語活動を行う場面の設定

では、言語活動の質を高めるためには、どのような点に留意すればよいのでしょうか。私が考える7つの指針を紹介します。

どの場面で行えば効果的か

どの教科にもいえることですが、どの単元の、どこで言語活動を行うかによって、取り組みの深さは変わります。生徒同士で交流したり、ワークシートに自分の考えを書いたりするためには、前提となる基礎的な知識が必要で、それらを教えた上で活動を行うのか、それとも、まず考えさせてから知識を教えるのか。単元の特性や課題の内容に応じて、効果的な場面を考える必要があります。

2 発問の工夫

生徒が深く考える発問にする

発問は、生徒から出来るだけ多様な意見が出やすいもの、正解に幅があるものにする活動が深まります。

ある中学校の社会科の先生は、生徒に「豊臣秀吉と徳川家康のどちらが庶民に人気があったのか」と投げ掛け、話し合いをさせました。普通なら「秀吉と家康はそれぞれ何をしたのか」と聞くところですが、それでは教科書や資料を読めば答えがすぐに出てしまいます。「どちらが人気があったのか」と問えば、2人の業績を調べるだけでなく、業績を意味付けしたり、中世から近世への時代の流れを俯瞰したりすることが必要になります。単に知識を身に付けるだけでなく、思考と判断を伴った活動となるのです。

数学でも、計算の結果だけを答えさせると、○か×かだけですが、解の求め方に着目すれば複数のアプローチが可能になります。生徒は自分なりのやり方を考えられます。

このように、結論に幅がある発問を工夫することが、結果的に生徒が自分の頭で深く考えることにつながっていきます。

3 情報の量と質の調整

思考の前提となる情報をどう与えるか

1 言語活動を行う場面の設定とも関連しま

*プロフィールは2014年3月時点のものです

すが、言語活動を行う際、生徒にどの程度の情報を与えるかも重要です。根拠に基づいて考えさせるためには、それに必要な情報を過不足なく伝えるべきでしょう。生徒の様子を見て、議論が滞っているようであれば、「江戸時代の記録にはこんな農民の様子が記されているよ」というように追加の資料を与え、一歩踏み込んで考えさせるような支援が必要です。必ずしも、教科書の情報だけに限る必要はありません。

一方で、理科の実験について、教科書に必要なことが全て書かれている場合には、単元に入る前に生徒に実験の手順を考えさせ、一通り意見が出た後に教科書を見ながら解説するという方法も考えられます。生徒からどのような意見が出るのかを想定して、情報の量と質を調整することが重要です。

4 考える時間の確保

一人で考える時間が活動を深める

言語活動では、生徒が課題について考え、自分なりの意見を持つことそのものが大切です。ただし、頭の中だけで考えていたのでは、周りは支援も評価も出来ないのです。書かせたり発表させたりする必要があります。ディスカッションやレポートなどの活動は、あくまでも考えたことを深めるための手段だということをお忘れではありません。

それらの活動を行う時は、生徒が一人で考

える時間を十分に確保する必要があります。学習が苦手な生徒や考えるのに時間が掛かる生徒でも十分考えられるだけの時間がなければ、学力が上位の生徒や反応が速い生徒ばかりが他の生徒を引っ張っていくことになりかねません。その状態が続けば、学習が苦手な生徒は考えること自体を放棄してしまうかもしれません。

限られた授業時間の中で教えるべきことがたくさんあるので、言語活動をする余裕がないという先生もいるでしょう。確かに教科によつては、どの単元でも言語活動をしようとする時間が足りないかもしれません。実技教科などでは、ここぞという時だけでもよいのです。ただし、行う時は考える時間をたっぷり与える。教室が静まり返っても、それは生徒が頭を働かせている時間ですから、教師は待つことが大切です。

5 言語活動の評価の留意点

方向性の評価も行う

言語活動の大切な評価規準は、生徒が自分なりの考えを持てたかどうかということですが、問題への答えが間違っている場合、それは「知識・技能」の観点では減点であっても、言語活動で評価する「思考・判断・表現」の観点では、自分の考えを持てたという意味で加点の対象となり得ます。

気を付けたいのは、評価の尺度です。「知識・

理解」では生徒がどこまで理解しているかという到達度の評価を行います。「思考・判断・表現」や「関心・意欲・態度」は方向性の評価も行います。どの程度の水準に達しているかだけでなく、生徒の思考や意欲がどの方向を向いているのかを評価する必要があります。答えは間違っていないでも、与えられた情報を基に自分なりの考えを持たせたら加点するというように、評価に幅を持たせることが大切です。

また、生徒の思考は、途中経過も評価することが大切です。例えば、数学の証明問題で、「3段目まで出来たが、4段目に移項する時に間違えた」という生徒と、「全く最初から考えられない」生徒では、思考と判断に大きな差があります。思考の過程に対してきちんと評価・承認を与えることで、生徒は、正答への距離や誤答の質が分かり、次の活動への意欲が湧いてくるのです。

6 生徒への個別支援

生徒を丁寧に見て個別に支援

言語活動では、学力上位層の生徒が力を伸ばしやすい面がある一方、基礎知識が定着しておらず、調べ方や考え方が分からない生徒には、個別の支援が必要になります。

一人では考えられない、自分の意見を持っていないという生徒には、生徒が考えたり書いたりしている時に机間指導を行い、「資料集の〇ページを見てごらん」等のアドバイスをす

言語活動を通じて高める生徒の力——新教育課程の中間総括として

るのもよいでしょう。一方、考えられている生徒には、更に考えを深められるように追加の資料を提示するなど、個別に対応していくのです。先生は授業中の生徒の様子をきめ細かく観察し、学力レベルに応じた支援を行う必要があります。

7 雰囲気づくり

日頃から自由に話せる雰囲気をつくる

生徒が自分の考えを自由に表現できるように、日頃から授業の雰囲気づくりをしておくことも、言語活動の成否を左右します。

先生方は、普段の授業で自分が用意した正解が出てくるまで、生徒を指名し続けてはいないでしょうか。そればかりになると、生徒は「正解が出ないと先生は嫌がる」「正答に行き着かなければ考えても無駄だ」と思い、思考自体をやめてしまいかねません。

普段の授業から、**②発問の工夫**で述べたように、多様な意見が出やすい発問をし、正解が出てこなかったとしても、「よい視点だったね」「でも、結論がまだあいまいだから、友だちに聞いてみよう」というように、考えたことをきちんと評価し、誤答を生かしながら授業を進めていく。正答のみを受け入れ、誤答を拒絶するのではなく、その子なりに根拠を持って考えた意見を大切にすると、根拠をつくる必要があります。そうした指導の積み重ねが、「自分で考えることに意味がある」

というメッセージにつながるのです。

言語活動の意義を保護者に伝えることも学校の使命

言語活動は、思考力・判断力・表現力を伸ばすことに適している一方で、活動自体に時間が掛かるため、高校入試を強く意識している保護者の中には、知識を教え込む授業の方が分かりやすく、試験の得点に直結する良い指導だと考えている方もいます。全校で言語活動を推進するためには、保護者の理解を得ることも大切なポイントになるでしょう。

保護者に言語活動の意義をしっかりと伝え、家庭でも子どもと語り合う習慣を付けてほしいというメッセージを、学校から積極的に発信していくべきです。例えば、テレビのニュースを見ながら、経済の問題について話し合ってみる。ニュースの内容を正確に理解できなくても、目の前のことに興味関心を持ち、自分なりの意見を持つようになるには、学力的にも伸びるということを保護者に理解してもらうことが重要です。また、高校入試でも、考える力を問う問題が増えていきます。考える力こそ社会で求められている力であるという認識が、定着してきているのです。そのことを伝えれば、保護者にも言語活動の重

要性がより理解しやすくなるでしょう。管理職が中心となり、そうしたメッセージを発信していくことも、今後ますます重要になると考えます。

何より大切なのは、生徒が「人生80年時代」を生きていくために身に付けておくべき力は何かを先生一人ひとりが考え、どのような指導が必要かを模索し続けていくことです。先進校の取り組みに学び、自分の教科で何が出るのかを考え、言語活動を実践してみてはいかがでしょうか。先生自身が、言語活動によって生徒の思考が深まるという経験をすれば、授業の質の向上に向けた大きな一歩になるはずです。

効果的な言語活動を実践するためのポイント

- 1 言語活動を行う場面の設定** 言語活動が効果的に行える場面を設定する
- 2 発問の工夫** 思考を深められる発問にする
- 3 情報の量と質の調整** 思考の前提となる情報をどう与えれば活動が深まるかを考慮する
- 4 考える時間の確保** 学習が苦手な生徒でも十分考えられるだけの時間を確保する
- 5 言語活動の評価の留意点** 考えた内容だけでなく、考えが持てたかという観点でも評価する
- 6 生徒への個別支援** 活動中は生徒の様子を丁寧に観察し、個々に適した指導をする
- 7 雰囲気づくり** 普段から自由に表現できる雰囲気を授業の中につくっておくことで、言語活動も活発になる